

# 書物史における Sir William Dugdale の *The History of St. Paul's in London* (1658)

高野美千代

An Approach to Sir William Dugdale's  
*The History of St. Paul's in London* (1658)

TAKANO Michiyo

## Abstract

Sir William Dugdale's *The History of St. Paul's Cathedral in London* was published in 1658 in the Interregnum, when many royalists were excluded from public life, and were obliged to live privately and unobtrusively.

Dugdale, as an antiquary, wanted to make his contemporaries aware of the sad condition of the most important church in London, which is also a symbol of the Church of England as a whole. The cathedral had been badly damaged by the enemies of the Anglican Church, and was in desperate need of restoration. Perhaps it would never be restored, for the Church of England was effectively extinct, after Parliament had outlawed its services, and invalidated its bishops. Dugdale published the book with illustrations by Wenceslaus Hollar which depicted the interior and the exterior of the cathedral, and showed many of the monuments to the great men of church and state, as they were in the prosperous years of the 1630s.

This paper examines *St. Paul's* as one of the most significant books in seventeenth-century book history. This is a good example of an early book illustrated with many artistic engraved plates which were paid for by subscribers. By studying the relationship between the subscribers and their plates, which were often of a tomb of some notable person in the past, we can trace the historical background of the church or the political and religious milieux of the subscribers. Also, this study demonstrates that the book conveys a strong sense of royalism and Anglicanism. By a combination of the text and illustrations of the highest artistic standard, Dugdale conveys a message to hidden Anglicans all over the country. They must honour the memory of the Church, and hope it will be restored one day. In this respect this book bears great importance in the history of the book in the 17th century.

キーワード：ウィリアム・ダグデール 『聖ポール寺院の歴史』 書物史

Key words : Sir William Dugdale, *The History of St. Paul's Cathedral in London*, book history

## 序

英国ロンドンのシティ地区に位置する聖ポール寺院 (St. Paul's Cathedral) は、300 年ほど前に完成した姿を現在もとどめている。建築家クリ

ストファー・レンによって設計されたこの大聖堂は 1675 年に着工、1710 年に完成されたイギリス・バロック建築の代表格である。ただし教会としての聖ポール寺院ははるかに長い歴史を持つ。

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

遡ればサクソン時代の王であるアゼルベルトによって創設され、ノルマン時代 1063 年には旧聖堂の一部が建築されている。その後 2 世紀をかけて完成された旧聖堂は、当時ヨーロッパで有数の奥行きを誇った。それ以来 6 世紀の間、すなわち 1666 年ロンドンの大火で壊滅的な被害を受けるまで、ロンドンのランドマークとして君臨した。大火では聖ポール寺院を含むシティ地区一帯が焼け野原と化し、聖堂も甚大な打撃を受けたのである。現在の寺院は復興事業の一環として建築されることになった。

写真の技術などももちろん存在しなかった時代の聖ポール寺院旧聖堂の姿をわれわれは一冊の本から知ることができる。好古学者ウィリアム・ダグデール (William Dugdale, 1605-1686) が著した『ロンドンの聖ポール寺院の歴史』(*The History of St. Pauls Cathedral in London*, 1658) がそれである。この書物は、大火で失われた聖堂の構造を文章と数々の版画によって細かに伝えている。

図版の作者として知られるのはウェンセスラウス・ホラー (Wenceslaus Hollar, 1607-1677) である。ダグデールとは親しい間柄で、ダグデールの別の作品のためにも版画を作成している。ホラーの技術は当時の版画作家の中でも卓越しており、聖ポールが大火で失われる前の最後の姿を、1630 年代に建築家イニゴ・ジョウンズによってなされた修復も含めて、微細に記録している。ゆえに書籍『聖ポール』は歴史的資料としても十分な価値を持つ。しかしこの本の価値は、大火で失われた旧聖堂の姿を後世に伝えているという点のみのだろうか。収められた数々の版画は、現代の写真のように建築物の全体像を映し出す。ただし、図版はそのすべてが『聖ポール』が出版された 1658 年に実在した聖堂の姿を忠実に再現したものではない。

この小論では『聖ポール』を 17 世紀イギリスの書物史上もっとも重要な書籍のひとつと位置づけ、ホラーによる版画から判明することからを中心に分析した上で、『聖ポール』が旧聖堂の特徴をいかに伝えるものなのか考察していく。また、

この書物に著者のいかなる意図が作品にこめられ、表現されているかを検討したい。

## I 著者ダグデールと彫刻師ホラー

『聖ポール』(フルタイトルは *The History of St. Pauls Cathedral in London. From its Foundation until these Times: Extracted out of Originall CHARTERS. RECORDS. LEIGER BOOKS, and other MANUSCRIPTS. Beautified with Sundry Prospects of the Church, Figures of Tombes, and Monuments.*) が出版されたのは 1658 年、共和制時代のことであった。ただしその年には護国卿オリヴァー・クロムウェルが没し、その息子リチャードが後継者となるなどしており、時代の主調は幾分変化しつつあったと推測することもできる。とはいえ王族との関連が深い寺院を扱う書物であるため、出版は容易には進まなかった。

著者ダグデールは共和制以前から好古学者 (antiquary) としての才能を開花させ、紋章官 (herald) に任ぜられるなど、周囲から注目される学識者であった。ダグデールが友人と共同で執筆した『イギリスの修道院』(*Monasticon Anglicanum*, 1655-1673) は、革命の混乱の中で攻撃を受け破壊されてしまう可能性が高いと懸念された教会の財産を、書物の中に記録するという意図の下に計画された。そして『聖ポール』についても同様の趣旨があった。1656 年、ダグデールは聖ポール寺院に関する膨大な量の記録資料を入手することになった。すでにひどく傷んだ資料であったため、一冊の本に収めることが急務と捕えた。と同時に、宗教改革以前のつまり最盛期の時代聖ポール寺院を伝える文章とイメージを書物の形に整え、筆者の同時代の知識人に知らしめようとした。ダグデールは『聖ポール』をサー・クリストファー・ハトンに捧げているが、その献呈の辞の中で次のように語る。

... by Inke and paper, the Shadows of them, with their Inscriptions might be preserved for posteritie, forasmuch as the things themselves were so neer unto ruine. .... I

have thought fit, in the first place, to begin with this Church of St. Paul, as one of the most eminent Structure of that kinde in the Christian World; having historically spoken of its first Foundation and endowment; as also of what else I can finde memorable thereof; and represented its Fabrick and Monuments, in the most exact and prefect way I could devise.<sup>1</sup>

ハトンの奨めもあって英国内の様々な寺院を訪れ、その傷み具合を確認してきたダグデールは、教会の碑文や遺跡遺物を書物に収めようと考えてきた。聖ポール寺院にまつわる多大な文献資料を偶然手にしたのをきっかけに、ダグデールはこの書物の執筆に着手し、1年足らずで全体を書き上げてしまう。失われつつある古きものを後世に残すという、自身に課した好古学者としての職務を果たそうとしたのだ。

1650年代、聖ポール寺院はかつての姿をとどめてはいなかった。15世紀ヘンリー8世によって行われた修道院の解体以降、教会の内部は傷み始めた。また、英国国教会自体も、建築家ジョウズによる修復がなされた1630年代ころまでは繁栄を極めていたが、革命の混乱に巻き込まれ、さらには共和制下ではその機能が停止しており、聖堂はことごとく濫用されていた。1659年にジョン・イーヴリンが匿名で出版した論文には次のような記述がある。

Amongst the pieces of modern Architecture, I have never observ'd above two, which were remarkable in this vast City. The Portico of the Church of S. Pauls, and the Banqueting-house at White-hall.... But O! how lothsome a Golgotha is this Paul's! I assure your Lordship, that England is the sole spot in all the world, where, amongst Christians, their Churches are made jakes, and stables, markets and Tipling-houses; and Publicans and Money-

Changers: In sum, where these excellent uses, are pretended to be the markes of Piety and Reformation.<sup>2</sup>

イーヴリンもまた1650年代の聖ポール寺院の惨状を嘆いている。建物はもはや教会としての存在意義を持たず、祈祷とは全くかけ離れた用途に使用されているのである。馬屋や店舗、あるいは公衆便所と化してしまっている。これは英国国教会信奉者にとって耐え難い状況であったに違いない。

引用の冒頭で彼は聖ポールのポーチコ（柱廊）に加え、ジェームズ一世の栄華を具現するホワイトホール宮殿のバンケティングハウスについても高く評価している。いずれもイニゴ・ジョウズによるスチュアート朝ロンドンを象徴する建築で、芸術と宗教の繁栄の記憶をロイヤリストに呼び起こすような存在であった。本来諸外国に対しても誇るべき価値のある建物や教会が共和制下においては濫用されており、この事実をロイヤリストであるイーヴリンは出版物の中で非難したのである。ダグデールの場合と同じ不満を持っていたにせよ別の形で自身の思いをアピールしたことになる。直接的な批判をする代わりに、古い歴史を記録しその価値を訴えることで人々の関心を聖ポールに向けようとしたのだ。

ダグデールとホラーの出会いは1650年代初頭で、当時すでに版画家ホラーの名前はロンドンでもよく知られていた。1607年プラハに生まれたホラーは、若いころから芸術を志し、故郷を離れて活動を始めた。1636年、アルンデル卿と出会ったことによってイギリスでの創作が行われるようになった。1640年には皇太子であったチャールズ一世の絵画教師を務めるなどホラーの才能は広く認められるようになっていた。1644年には一旦アントワープに移り住んでいるが、ダグデールと出会う1650年代初頭から再びロンドンでの生活を始めた。

ホラーは風景や建築ばかりではなく、人物とくに女性の装束を描写する作品も得意としていた。1630年代前後に評判となったこの種のいわゆる「コスチュームプリント」は、流行のファッション

ンを扱い、レースや毛皮の微細なタッチが大変特徴的な作品群であった。コスチューム以外にも、肖像はもちろんのこと、動物や植物、昆虫、貝殻など、細かな線を用いた作品をホラーは多数仕上げている。ロンドン有数の版画商ピーター・ステントから請け負った仕事は数多く、その主題は幅広いものがあった。ホラーは自分自身で描いた絵をもとに版画を作るだけでなく、他人の油彩やデッサンを版画作品に仕上げることも数多く行っている。レオナルド・ダ・ヴィンチやレンブラントの作品をエッチングで仕上げてもいる。類まれな才能を持った芸術家であった。ただし、この『聖ポール』のために制作された作品に生きた人物の描写はなく、聖堂を取り巻く当時の風俗は収められていない。ダグデールの書物においては、特に紋章、墓、墓碑等を本来の姿に仕上げるのが求められ、その要望にホラーは完璧に応じている。すでに聖堂の内部そして周囲までも 1650 年代までにはすっかり荒れて退廃した雰囲気と化していたのだが、『聖ポール』におけるホラーによる作品は一貫して聖堂の建築、内部構造、墓を、1641 年に資料を基に制作されている。

当時ダグデールは友人で翻訳家・出版者のジョン・オグルビー (John Ogilby, 1600-1676) と協働して書籍の執筆に取り組んでいた。ここにホラーが加わって完成された書物が『英国の修道院』*Monasticon Anglicanum* (1655-)、『ウォリックシャの故事』*Antiquities of Warwickshire* (1656)、そしてこの『聖ポール』(1658)である。オグルビーは版画を用いた書物の出版の発展のきっかけとなった人物といえる。ラテン語に秀でたオグルビーは 1654 年にウェルギリウスの翻訳を出版していて、それは英国における初期の豪華な挿絵本の画期的例である。また、イソップ童話集においても文字だけでなく、挿絵によって読者に視覚的効果を与えることを意図した。また、オグルビーはサブスクリプション (あるいはスポンサーシップ) によって高価な版画を書物に挿入することに成功し、書物史においては重要な役割を果たしている。オグルビーがむしろ「やり手」の実業家的側面を持っていたおかげで、ダグデールは多くの

スポンサーを得て図版を豊富に取り入れ、自身の著作を出版することが可能になったのである。

また、『聖ポール』の口絵部分のダグデールの肖像はホラーがデッサンし、版画にしたものである。ダグデールはつばの広い帽子をかぶり、口ひげを携えている。上着の袖の部分とあわせの部分にはホラーが得意とする毛皮の縁取りがされている。場所はダグデールの書斎と考えることができ、彼は机の横に腰掛け、書棚を背にしている。背景には書棚以外には何もなく、しかも書棚にあるものは雑然と置かれた分厚い書籍・資料である。机の上にはペンとインク、そしてダグデールが右手に持つ一枚のマニスクリプトらしきものがある。文字が書かれた面を指差しているように描かれているので、それが『聖ポール』執筆の際に使用された資料の一枚であることを示しているのかもしれない。同じく机の上に彼の著書の *The Antiquities of Warwickshire* と *Monasticon Anglicanum* が、雑然とはあるが表題がはっきりと示されて置かれている。表題を示したのには、別の著作の紹介という意味も当然あるが、この部分は特にホラーとの関係を示唆するものと考えることができよう。ホラーはここに示された書籍においても数々の版画を作成し、書籍の完成に貢献しているからである。

## II 『聖ポール』にこめられたメッセージとは

『聖ポール』はフォリオで 303 ページから構成される。含まれる銅版画は、ホラーによる著者ダグデールの肖像を含めると全 42 点になる。寺院の全体図、部分的な平面図、四方から見た外観、そしてチャペル、ネイヴ、個人の墓と墓碑を含む寺院の内部など、様々な視点から見た聖堂の姿である。すべてにその版画を作るための費用を負担したサブスクライバーの氏名が紋章とともに彫りこまれている。サブスクリプション制度は印刷に多大な費用がかかる書物の出版を可能にする出版方式で、17 世紀のイギリスで定着し始めていた。<sup>3</sup> 特定の版画に対する資金提供者 (サブスクライバー) とその版画の内容との関連性を見ることによって、この書物の制作の背景の一端を明ら

かにすることができないだろうか。ここではいくつかの例を挙げながら考察していきたい。

まず、聖堂内の墓の版画に注目することにしよう。『聖ポール』では、まずダグデールが寺院の歴史を追って述べていくのだが、つぎの墓と墓碑を扱う部分には、独立したタイトルページがあり、"A View of the Monuments, Situated in and about the Quire, Side-isles, & Chapels Adjacent; As they Stood in September, Anno D. M DCXLI."との表題が書かれている。さらに、"With their Epitaphs Exactly Imitated; Of Which In regard to Every Eye, the Character is not so Legible, I have added the Copies; with Such other Monumentall Inscriptions, made upon Tablets of Marble or otherwise, as were then extant there"<sup>4</sup> という説明が続いており、すなわちこの書物の中では、挿絵とともに紹介する墓が1641年9月時点で教会内部のどこに、どのような形で存在したかが推測できるようになっている。現在でも残る貴重な例としては聖ポールの首席司祭であったジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の墓があるが、その他多くは1666年の大火で失われてしまっている。

版画挿入に必要な費用を担った人々の一覧は、『聖ポール』の巻末1ページを使って記されている。約40名のそれら出資者の中には、現代にまで名を残している人物も多い。書籍にこめられた著者のメッセージや作品執筆の背景を考慮するならば、当然支持者はロイヤリストであることが推測される。典型的な例としては、とあるロイヤリストが先祖の墓の版画を寄付するものである。たとえば、ダグデールがこの書物を献上したクリストファー・ハトン (Christopher Hatton, bap. 1605-1670) が、同じ名前に従兄にあたるハトン (Sir Christopher Hatton, c.1540-1591) の墓の版画費用を負担していることが挙げられる。サー・クリストファーは若いころから女王に寵愛されたエリザベス朝の宮廷人で、政治家、大法官としても知られる。そんな彼の後継者となったハトンは1620年代には政治の道に入り、国王チャールズ一世から絶大な信頼を受ける存在となった。

1638年にダグデールとハトンは出会っている。ハトン自身が好古学研究に強い関心を抱いていたため、ダグデールに対し研究の環境を整えるなど様々な便宜を図った。さらにはダグデールが紋章官になるための口添えをするなど、ダグデールの人生に大いなる影響を与えた人物である。

サー・オーランド・ブリッジマン (Sir Orlando Bridgeman, 1609-1674) も一枚の版画のサブスクライバーとなっている。<sup>5</sup> ブリッジマンは裁判官であり、同じ法曹界の重鎮であったヘンガム (Ralph Hengham, c.1235-1311) の墓の版画に対して寄付をしている。二人に血縁関係があったかどうかは不明であるが、法に携わる者としてブリッジマンがヘンガムに対する敬意を持っていたことは推測できる。

ヘンガムはエセックスの出身と言われ、20歳のころ法曹界に入り、その才能を發揮して1271年より巡回裁判の法廷弁護士、さらには裁判長を務めた。ヘンリー3世没後、巡回裁判は行われなくなったが、ヘンガムは1274年に王座裁判所の首席裁判官となり、15年間その職務を果たした。エドワード一世朝にあたるこの時代、イングランドでは盛んに法律問題を議論する集会が、国王の呼びかけでたびたび行われていた。そんな時代にあつてヘンガムはエドワード朝制定法の草案にかかわったとされており、有能な裁判官としての力を發揮していった。しかしながら1290年、彼は職を失うことになる。ある裁判での細かな手続き上の失敗によるとの理由であった。ヘンガムは有罪となり投獄され、釈放に必要な費用および恩赦のための費用は1万マークといい、罰金としては当時最大の額の支払いを求められた。不遇なときを乗り越えてヘンガムは法廷に復帰し、1309年まで裁判官を務めた。彼の功績は法曹界の後継者育成のために尽くしたことであり、裁判の最後には法律の重要部分の解説のため時間を取ったほか、裁判に関する書物を残すなどしている。

ブリッジマンはジェームズ一世のチャプレンを務めたジョン・ブリッジマンの子としてエクセターに生まれた。父の影響で幼いころからギリシャ語、ラテン語、そしてヘブライ語を学び、ケンブリッ

ジ大学に進んだ。卒業後、1632年からインナーテンプレート法曹学院で学び、1638年には法曹界に入った。若いころより着実に出世し、数々の要職を歴任するようになった。ロード大司教の下で特別行政区管理人を務め、チャールズ一世の法務次官となった。1640年に故郷に戻ってからは高教会派ロイヤリストとしてロード大司教が進める教会の改革を支持した。革命期にはその立場を崩さずにしたため、革命後、空位期には裁判に出ることを一切許されなかった。代わりにその間彼は不動産譲渡取扱人として財産の永代所有に対する規律を確立するなどして、王室の財産が譲渡されたり没収されたりする危険から守ろうとした。しかし彼自身の財産は無条件相続地として保護されず、約2000ポンドの罰金を科された。その後は共和政と和解した形で1650年代をウェールズの田舎で平穏に暮らしたというが、水面下ではロイヤリストとして王政復古の道筋をつける努力を続けていた。彼が『聖ポール』におけるヘンガムの版画のサブスクライバーになったのがこの頃である。もっとも不遇な時代にあったブリッジマンは、かつて同じイングランドの法曹界で最も有能とされるも挫折を味わい、その後再び第一線で活躍したヘンガムに自分自身を重ね合わせていたのだろう。王政復古そして裁判官としての法曹界復帰への強い決意がこのサブスクリプションに込められていたはずである。

また、サブスクライバーの中には著者ダグデールの友人サイモン・アーチャー (Sir Simon Archer, 1581-1662) の名前もある。判事であり好古学者でもあったアーチャーは、聖ポールの首席司祭アレグサンダー・ナウエル (Alexander Nowell, c. 1516/17-1602) の墓の版画のための寄付をしている。ランカシャー出身のナウエルはオックスフォード大学を卒業後しばらくして聖職者となり、名門ウェストミンスター校の教師となった。政治にも携わった。しかしながらエドワード4世の信頼を得ていたプロテスタントであったために、カトリック教徒のメアリー朝になるとナウエルは聖職禄を取り上げられ、大陸に亡命した。亡命先では同じプロテスタント信者と交流を持ち、

宗教的議論を重ねていった。エリザベス女王が即位するとナウエルは祖国に戻り、まもなく重要な聖職者として認識される。そして1560年、聖ポール寺院の首席司祭に任命され、生涯この職を務めた。英国が大いに繁栄したエリザベス朝を代表する聖職者である。

アーチャーはウォリックシャ出身で、グレイズイン法曹学院で学んだあと地方の政治に関わった。革命期は宗教的理由から議会派側に立った。クロムウェル政権で判事を務めるなど、社会的立場はその他のサブスクライバーとは異なる。しかしながらアーチャーには好古学研究への興味という、ダグデールとの共通項を持っていた。実際にアーチャーはダグデール以前にすでに故郷ウォリックシャの歴史・故事に興味を持ち、それにまつわる文書や資料を所有していた。それらは同郷のダグデールに提供され、*The Antiquities of Warwickshire* が執筆される際に不可欠な資料となったのである。ダグデールはアーチャーを作品の献呈者とするなど、生涯彼に感謝の念を持ち続けた。政治的・宗教的スタンスにおいて二人は異なっていたが、アーチャーは純粹に好古学者として、そしてダグデールの友人として『聖ポール』の出版に協力したと考えることができる。アーチャーは非国教会派のサブスクライバーという珍しい例である。

同じ好古学者の仲間、ジョン・オーブリー (John Aubrey) もサブスクライバーの一人である。彼は自身の曾祖父にあたるウィリアム・オーブリー (William Aubrey) の墓の図版挿入費用を負担した。ウィリアムはエリザベス朝の法律家であり、その知識と判断力が認められてカンタベリー大司教そしてエリザベス女王にも重用された。王政復古前のロイヤリストにとって、エリザベス朝の繁栄も忘れがたい繁栄の記憶であった。ナショナリズムに湧き上がった時代の墓の様子は版画によって再現されており、様子を知ることができる。中央部分にウィリアムの半身像があるが、彼はエリザベス朝独特の襟がついた上衣をまとい、ハムレットさながらに左手をどくろの上に置いている。墓の上部にも右側にどくろ、左側には羽の生えた砂時計があり、中世以来の *memento mori* の思想

がうかがえる。墓碑には彼の功績が残され、ひ孫のジョンはオーブリー家繁栄の礎を築いた曾祖父ウィリアムについての記憶を、一族を代表して版画によって後世にとどめようとした。

### III 版画と書物

書物がテキストの内容以外に読者に伝えるものは多大である。『聖ポール』の場合はテキストに加え、図版に託されたメッセージの意義は顕著と言える。挿絵のサイズはフォリオ1ページ分のものが標準であるが、外観図などの中にはフォリオ2ページつまり見開きの大判もある。版画は寺院の至るところを精巧に捉え、再現している。とは言っても、当時の悲惨な状態ではなく、聖堂は1630年代の修復作業が反映されたままの姿で表されている。

聖堂の全体図等、建築物の図版は14点あるが、そのうちの4点については同一のサブスクライバー、ジョン・ロビンソン (Sir John Robinson, bap.1615-1680) による。彼はカンタベリー大司教ウイリアム・ロードの甥にあたり、彼の父親も国教会の大執事を務めているなど、強くアングリカンの血筋を受け継いでいた。ところが彼は聖職者にはならず、商人そして政治家として成功を収め、『聖ポール』が出版されるころにはロンドンの市政に関わっていた。とはいえ彼はロイヤリストで、クロムウェルの死後すなわち『聖ポール』出版の年以降は王政復古に力を尽くした人物である。ロビンソンに4枚もの版画を負担する決意をさせたのは、彼の持つ財力と国教会派の血統、そしてロイヤリストとしての心情であったはずだ。その4枚の版画に注目してみたい。

4枚のうち3枚はフォリオ見開きのサイズで、残りの1枚のみフォリオ1ページに縦長に収まっている。それらは東西南北各方向から見た聖堂の外観である。この旧聖堂は、現在の聖ポール寺院よりも実は規模的にも大きく、650×325フィートであり、さらに高さも現在のドームを上回るものであった。ただし16世紀の宗教改革以来、教会の建築を維持し修復していく費用が甚だしく不足する状態が続いたため、建物は傷み、部分的に

は崩壊が進んでいった。この4枚の版画のうち、おそらく最もよく言及されるものは、西側すなわちエントランス部分から見た聖堂の外観の版画であろう。これには、ジョン・イーヴリンの記述にもあった、イニゴ・ジョウンズによるポーチコがはっきりと描き出されている。ポーチコは、さきに引用したジョン・イーヴリンの文章からもわかるように、聖ポールをヨーロッパ有数の建築物と認めさせるものになった。ダグデール自身も『聖ポール』の中でつぎのように述べている。

... that most magnificent and stately Portico, with Corinthian Pillars, which at this own charge he erected at the West end thereof; where he placed the Statues of his Royall Father (King James) and himself, for a lasting memorial of this their advancement of so glorious a work. Which Portico was intended to be an ambulatory for such, as usually by walking in the Body of the Church, disturbed the solemn service in the Quire.<sup>6</sup>

イニゴ・ジョウンズ (Inigo Jones, 1573-1652) はスチュアート朝を代表する建築家であり、ジェームズ一世そしてチャールズ一世のもとで王室に関わる多くの仕事を成し遂げた。絵画および舞台芸術をイタリアで学んでいたジョウンズは、1600年代初頭から、数々の宮廷仮面劇の舞台装置や衣装を担当した。のちに再びイタリアに学び、イタリアルネサンスのパラディオ式建築様式を英国に持ち込み、木造の建物が主体であった英国の風景に変化をもたらした。彼はジェームズ一世によって王室建築総監督官に任ぜられ、ホワイトホール宮のバンケティングハウス (1622年完成) やグレニッジのクイーンズハウス (1635年完成) を設計している。ポーチコの屋根にはジェームズ一世・チャールズ一世の像があり、この聖堂が王室と深く関わってきたことを明示している。また、ポーチコは屋根付の歩廊となっており、それまで聖堂の中で商いをするなどして教会の風紀を乱し

てきた民衆に新たな居場所を提供するものとなった。聖堂修復作業に貢献した高教会派のカンタベリー大司教ウィリアム・ロードもこのような輩たちを祈りの場である聖堂から締め出すことを望んでいた。それが実現したのである。しかしながら、実際には国王の像は1640年代の革命期に議会派によってすっかり破壊され、ポーチコには雑然と店が並び教会内部も以前のように宗教以外の目的で濫用されるようになっていった。

ダグデールは聖堂修復に関わる説明を詳細に行い、1639年の修復時にかかった費用の明細にも触れている。中世に反映していた聖ポールの姿を復元しようという願いのもと行われた修復作業が反映した形で図版を掲載しつつも、文章においては現実をありのままに伝えている。

For by taking the away the inner Scaffolds, which supported the arched vaults, in order to the late intended repair; the whole roof of the South Cross is already tumbled down; and the rest severall places of the Church, often falling.<sup>7</sup>

革命期の騒乱において、聖堂内部で修復中途の段階にあったアーチ型天井の足場が撤去されると、南側の袖廊の屋根はすっかり落ちてしまい、また、その他の部分もところどころ崩壊してしまっていた。このような現実を隠し立てはしない。むしろあるべき姿（図版）と実際の姿（テキスト）の対比を明確にすることが彼の意図であったに違いない。スポンサーのロビンソンはロード大司教の甥ということもあり、4枚の版画のうち2枚を1630年代の修復を促進した叔父に捧げた。そこにはジョウonzの計画通りに修復が進んだ形の完璧な聖堂の南北両側面が描かれている。実はそこにある南側の翼廊の屋根こそが実際には落ちてしまっていたことになる。

ダグデールは上の引用の続きでつぎのように述べている。

Out of a sad contemplation, therefore, that so glorious a structure, thus rais'd, inricht, and beautified by the piety of our deceased Ancestors, should be utterly destroyed, and become a wofull spectacle of ruine; I have adventured, though much unworthy for such an undertaking, to give some representation, aswell to the present age, as future times, of what it hath been. And having done my best endeavour; which in duty I conceive myself obliged unto, merely as I am a son of the Church of England ... to revive the memory of its noble Founders, and worthy Benefactors;...<sup>8</sup>

英国国教会信徒として聖ポール寺院の繁栄した姿を同時代の人々、そして後世の人々のために残したかったと言うダグデールは、この聖堂がいつの日か廃墟と化してしまうのではないかという懸念を隠そうとはしない。王政復古まで、夜明けの見えない日々を過ごしていたロイヤリストとしては当然のことであったはずだ。それから2年して王政復古を迎えると彼の聖堂修復への願いは現実にかなうことになる。

#### まとめ

1640年代の革命以来、英国においては芸術性の高い歴史的宗教的遺産が破壊され続けていた。そもそも17世紀の好古学研究は、過去への興味に加え、このように失われつつあるものを残そうという思いがきっかけとなっていた。共和政時代にも歴史的宗教的遺産が失われるという動きが止まらず、ダグデールはこのことを大変危惧し、また、ちょうど聖堂の歴史に関連する貴重な資料を手にしたことにより、『聖ポール』の執筆を行った。大火で失われた中世の建築物聖ポール寺院の詳細を今に伝えるという意味では建築史においても教会史においてもダグデールの『聖ポール』が貴重な文献であることは言うまでもない。しかしこの本のさらなる価値は、書物史において評価す

ることができるのである。ダグデールは好古学研究者として王政復古後に『イングランドの貴族』*Baronage of England* を出版している。実際には出版の30年前にはすでに資料収集を含み準備がされていたものだが、1676年ようやく出版がなされた。英国の貴族の系譜をまとめた詳細な資料となっている。貴重な好古学文献であるが、『聖ポール』の図版から期待されるような挿絵はこの本には施されていない。たとえば紋章を紹介することは可能であったはずだ。<sup>9</sup> ダグデールは資金面での困難から版画の挿入を断念したのか、それとも今回は『聖ポール』のときほど図版を不可欠とは考えなかったのか、理由をひとつに絞ることは難しい。むしろその両方が作用していると考えるのが賢明ではないだろうか。ダグデールはこの『貴族』のあと、ナイト爵位およびガーター勲を授与される。しかし書物史の視点から見れば『聖ポール』こそが、芸術的水準の高い版画を数多く用いて、著者の意図をより効果的に読み手に伝えることに成功したという大いなる価値をはらんだ書物と言えよう。さらに、ホラーの版画によって、この書物は芸術品の域に達したと言っても過言ではない。このことは、17世紀書物史において大きな意義を持つ。

『聖ポール』の制作は、英国の歴史的宗教的財産を後世に残そうという好古学者の願いが、銅版の発達そして版画作家ホラーの芸術性にまさに重なり合ったことによって初めて実現したものである。そしてその陰には図版に資金を提供したサブスクライバー／スポンサーの理解があった。共和政時代に野に下っていた数々のロイヤリストたち、アングリカンチャーチの聖職者、好古学者らが、後援者となって『聖ポール』の出版を可能としたのである。彼らにとって聖ポール寺院はアングリカンチャーチとイギリス王室を象徴するものであり、彼ら自身の過去・現在・未来を象徴するものであった。大いに繁栄し、誇りに満ちた時代の英国を決して忘れずにいるために、『聖ポール』にすべてを記録しようというダグデールの思いは支持されたのである。すべてを記録することによってダグデールは、より多くの人々に大聖堂の

姿とそれとは対照的な現在の惨状を知らせ、迫り来る崩壊と喪失の脅威を伝え、すみやかな修復の必要性を認知させるという目的を達成しようとした。聖堂の古い歴史を伝える傷んだ文献資料、碑文などは書物の中に活字として保存し、ヨーロッパ有数の建築物としてそびえる聖堂自体はそのあるべき姿を版画に収め、修復が行われるべき姿、いわゆる復元用モデルとして提示したのである。

1660年、王政復古となると、ロイヤリストは再び表舞台に立ち、英国国教会はようやくかつての機能を取り戻すことになった。チャールズ二世は父や祖父の遺志を継いだ形で聖ポール寺院の修復工事に理解を示し、ダグデールはその検討委員のメンバーとして新たなプラン作成に参加した。結局ロンドンの大火後に中世の旧聖堂はすべて取り壊され、1675年よりクリストファー・レンによるバロック様式の聖堂が建築されていく。旧聖堂とは全く異なる設計であったが、新たな計画を受け入れるのに躊躇はなく、ダグデールは建築費用の寄付を募るなどして大いに協力的な姿勢を示した。すなわち彼が希求したのは、英国国教会が繁栄し、聖堂の歴史が継続し、人々の信仰の場として発展することであった。その思いは著作『聖ポール』によって現在も伝えられている。

## 註

- 1 テクストは William Dugdale, *The History of St. Pauls Cathedral in London* (London, 1658) による。
- 2 John Evelyn, "A Character of England," *The Writings of John Evelyn*, edited by Guy de la Bedoyere (London: Boydell, 1995), p. 79.
- 3 サブスクリプション制度については Graham Parry, "Patronage and Learned Works for Printed Authors," *History of the Book in Britain*, vol. 4 (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), pp. 174-188 が詳しい。
- 4 Dugdale, *St. Paul's*, p. 59.
- 5 詩人・著述家としても知られるトマス・トラハーンは1667年からブリッジマンのチャプレンを務めた。散文作品 *Christian Ethicks* (1675) においてはブリッジマンの生き方を模範として扱い、*Roman Forgeries* (1673) では自らの作品を初めて出版することによって宗教上の問題で窮地に立たされていたブリッジマン

を擁護した。

6 Dugdale, p. 160.

7 Dugdale, p. 192.

8 Dugdale, p. 192.

9 ほぼ同時期のロンドンで出回っていた同種の書物と比較すると、たとえば John Guillim の *A Display of Heraldry* には版画を伴って多くの紋章が紹介されている。

### Selected bibliography

Globe, Alexander. *Peter Stent, London Print Seller*. Vancouver: U of British Columbia Press, 1985.

Griffiths, Anthony. *The Prints in Stuart Britain*. London: British Museum Press, 1998.

Leapman, Michael. *Inigo*. London: Review, 2003.

Parry, Graham. *The Arts of the Anglican Counter-Reformation*. London: Boydell, 2006.

---. *Hollar's England*. Salisbury: Michael Russell, 1980.

---. "Patronage and Learned Works for Printed Authors," *The Cambridge History of the Book in Britain IV*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

---. *The Trophies of Time*. Oxford: Oxford UP, 1995.

Roberts, Marion. *Dugdale and Hollar*. Newark: Delaware UP, 2002.

Strong, Roy. *The Tudor Stuart Monarchy*. 3 vols. London: Boydell, 1995